

平成 16 年度研究開発実施報告（要約）

1. 研究開発課題

幼小中一貫の教育力を生かした社会のグローバル化・高度情報化・超少子化の進展に対応する国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした 21 世紀型学校カリキュラムの研究開発

2. 研究の概要

幼稚園～中学校に領域「国際コミュニケーション」を新設して、豊かな外国語会話能力と情報活用能力を中心とした国際的コミュニケーション能力の育成に向けた幼小中一貫カリキュラムと 21 世紀型学校カリキュラムによる「学び」の研究開発を行う。

具体的には、

- ① 従来の教育課程を再編し、領域「国際コミュニケーション」を新設して、国際交流学習とマルチメディア学習の幼小中一貫カリキュラムと学習指導の研究開発
- ② 学級担任制による幼小連携（年少～小3）と教科担任制による小中連携（小4～中3）の保育・教科学習の研究開発
- ③ 社会性を育成するための幼小中連携の教科外活動や学校行事における感動体験を重視した「かかわり学習」の研究開発

等に取り組み、小3、小5、中1、中3を対象とした継続的な学力調査、関心・意欲・態度の評価、国際的コミュニケーション能力の評価、社会性の評価を行い、新しい「学び」についての提言を行う。

3. 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

研究推進に当たっては、まず国際化社会・高度情報化社会に対応する国際的コミュニケーション能力を育成するために新領域「国際コミュニケーション」を設置し、国際交流学習（多文化理解、外国語会話など）とマルチメディア学習（コンピュータ、テレビ、新聞学習など）を内容とした新領域の幼小中一貫カリキュラムと学習指導の研究開発を行う。これらにより、豊かな外国語会話能力と情報活用能力を中心とした国際的コミュニケーション能力が育成できると考える。次に、幼小連携、小中連携による 21 世紀型の保育・教科学習の研究開発を行う。これは、幼稚園～小学校第3学年は、幼小連携による体験を重視した保育・教科学習の研究開発を行うものであり、小学校第4学年～中学校は、教科担任制により小中連携の教科学習の研究開発を行うものである。なお、小学校第1学年～第3学年では、音楽科・図画工作科と体育科の内容の一部を統合した「表現科」と生活科の認識内容面を重視した「発見科」を新設する。これらにより、不易としても社会の変化に対応していくためにも必要な 21 世紀型の教科学力が確実に定着していくと考える。さらに、超少子化社会に対応した社会性を育成するために、幼小中連携の教科外活動・学校行事における感動体験を重視した「かかわり学習」の研究開発を行う。具体的には、道徳性の芽生えを培う幼稚園と連携した小学校第1学年～第3学年、小学校第4学年～中学校という区分による道徳、及び、小学校第1学年～中学校の自己実現力を重視した特別活動のカリキュラム開発を行う。さらに、小学校第4学年以上と中学校が連携するクラブ活動、幼小中一貫の学校行事（合同運動会、環境整備など）の在り方の研究開発を行うものである。これらを通して、子どもたちは広い視野に立ったものの見方や考え方を相互に学び合い、社会性をより伸張することができると思う。

(2) 教育課程の特例

領域「国際コミュニケーション」、小学校第1学年～第3学年の教科に「表現科」及び小学校第1学年～第2学年の教科に「発見科」を新設するために、以下のように教育課程を改変する。

- ① 幼稚園では、領域「国際コミュニケーション」を新設し、年間で 12～20 日程度を保育カリキュラ

ムの中に位置づける。

- ② 小学校では、国語、生活と総合的な学習の時間の時数を削減し、領域「国際コミュニケーション」を年間70時間程度新設する。
- ③ 中学校では、国語、技術・家庭と総合的な学習の時間の時数を削減し、領域「国際コミュニケーション」を年間105時間新設する。
- ④ 小学校第1学年～第3学年では「表現科」を、第1学年～第2学年では「発見科」を新設する。
 - ・「表現科」においては、第1学年で年間46時間、第2学年で年間50時間、第3学年では年間15時間新設する。そのために第1学年では、音楽科、図画工作科の学習の時間数各18時間と体育科の時間数10時間を移行する。第2学年では、音楽科、図画工作科の学習の時間数各20時間と体育科に時間数10時間を移行する。第3学年では、音楽科、図画工作科、体育科の時間数各5時間を移行する。
 - ・「発見科」においては、生活科の学習の時間数を移行し、学習時間数を第1学年で年間85時間、第2学年で年間88時間とする。

4. 研究内容

(1) 教育課程の内容

- この表の授業時数の1単位時間は小学校においては45分間、中学校においては50分間とする。幼稚園においては保育の総合的な活動の時間の中で別紙1の日数を配当することとする。
- 園児・児童・生徒の国際的コミュニケーション能力の育成を図り、言葉や文化の異なるさまざまな人々とかかわる力を身につけるために、第1年次に新設した幼稚園から中学校までを一貫した「国際コミュニケーション」の時間を第2年次の今年度も引き続き深める。第2年次における「国際コミュニケーション」の時間は主として次のような教育内容・方法で運用する。
 - ・「国際交流学習」として広島大学の留学生、ALT、姉妹校 Martin Middle School の生徒、Wahl Coates Elementary School の児童、ザンビアのペンパル、海外からの視察団との交流など、外国の人々との直接的な触れ合いを通して、多文化理解を図る。具体的には自国と他国の文化を尊重する気持ちを育てるために、発達段階に応じて和楽器や料理、遊び・スポーツ、茶華道、書道などに親しむさまざまな体験活動を行う。
 - ・「国際交流学習」として身近な生活の中で使うことばを用いたコミュニケーション活動を通して、小段階からの発達段階に応じた豊かな外国語会話能力を育てる。
 - ・「マルチメディア学習」としてコンピュータやテレビ、新聞などを活用して、自国のこと自校のこと自分のことについて国内外の人々に情報を発信し、相手と双方向に情報を共有する活動を通しながら、情報リテラシーの育成をはかる。
 - ・「マルチメディア学習」としてコンピュータを中心にテレビ、新聞などのメディア学習を通して情報活用能力の獲得に向け、幼稚園ではメディアに出会い、小学校低学年ではメディアに親しみ、高学年ではメディアを具体的な活用をし、さらに中学校においては情報の科学的な理解をもとに体験的活動を行う。
 - ・なお中学校における「国際コミュニケーション」の時間数を第1年次よりも35時間増やし、105時間とする。第1年次には異なる分野としてすすめてきた「国際交流学習」と「マルチメディア学習」であるが、将来的には両者が総合的に展開されることが必要となってくると考えている。例えば、国内や海外の学校とコンピュータやインターネットを用いてコミュニケーションすることで、相互理解を深めたり共同作業をしたりする際、そこには文化的・自然環境の差異があり、ある程度の時間を要する。つまり、マルチメディアを活用した国際交流を実際に外国の生徒と行うための学習に時間が必要となってくると、時間数を増すこととする。また、パソコンを使つての情報交換にとどまるだけでなく、共通のテーマに沿って課題解決を行ったり新しい文化や他者認識のあり方を創造したりすることに着目することで、新たな国際的コミュニケーション能力を育成するための単元開発やカリキュラム開発を行いたいと考えている。
- 3歳児～小学校第3学年までは、体験学習を取り入れた保育・授業を実践していく中で、表現力、認

識の側面を中心に6年間の中で一貫して育てたい力を設定している。その力の育成のために、「表現科」及び「発見科」を新設した幼・小での経験が階層的に生かされる幼小一貫カリキュラムの開発を進めていく。

- ・小学校第1学年～第2学年では、音楽科・図画工作科・体育科の一部を同一の枠組み内に統合し、新教科「表現科」を新設した。これは、幼稚園での「総合的に子どもの力を育む」という教育理念を小学校低学年に引き継ぐものでもある。そこで今年度は、小学校第1・2学年の「表現科」の中での総合的な表現活動を行う単元及びカリキュラムの開発を行いながら、それらが小学校第3学年の音楽科・図画工作科・体育科へとつながる力となるような教科のあり方の研究を進めていく。
- ・小学校第1学年～第2学年では、身のまわりの自然や地域社会にかかわる体験活動を通して、自然や地域社会の事象への認識の芽を中心に育てていくために、新教科「発見科」を新設した。生活科の内容を基礎に、目標に即して軽重をつけるとともに、幼稚園での保育内容や小学校第3学年での教育内容を勘案し、「飼育・栽培」「遊び（物を使った遊び・自然を感じる遊び）」「公共」「仕事」の4つの側面から活動を構成していく。そこで、今年度は、構想に基づいての単元及びカリキュラムの開発を進めていく。
- 小学校第4学年～中学校の教科学習においては、広島大学教官との共同プロジェクトとして実践的研究を行い、小中連携の教育力を生かした学習指導法の研究開発を行う。具体的には第1年次に設定した21世紀型教科学力をふまえて小中一貫カリキュラムの作成と評価の観点及び評価の規準の設定を行う。その際には、現行の学習指導要領で示されている教科学力の評価の観点もふまえながら、21世紀に新たに必要とする教科学力の評価のあり方の研究を進める。また、21世紀に求められる学力を効果的に身につけさせるために、小中の指導者によるTT方式や児童生徒の合同学習等の指導法について研究を進める。
- かかわり学習では、「教科外学習」と「クラブ・行事」において相互の関連性も考慮しながら、感動体験を重視した社会性を育成していくためのカリキュラム開発を進めていく。
- ・教科外学習を中心にしたかかわり学習では、超少子化に対応した社会性を育成することを目的に、教科外活動（道徳・特別活動・総合）における「かかわり体験」を重視したカリキュラム開発とその実践を行う。具体的には、第1年次を受けて活動プランの修正と開発などの実践研究を行い、幼小中連携の教科外学習における「かかわり学習」のカリキュラムの作成と学習指導法の研究開発及び評価の規準づくりを行う。
- ・クラブ・行事を中心にしたかかわり学習では、小・中の自伸会（児童・生徒会）執行部同士の交流を深めるような実践や組織編制を行う。三原学園の行事については、幼小中が連携するような行事の改革案に着手する。また、クラブ活動については、小学校第4学年まで学年を下げて交流を行い、定期的に交流をするための日程調整や、活動計画を立てていく。
- 研究成果の評価を行うために、学力調査や質問紙調査、外部評価を実施する。具体的には
 - ①小6，中2に対する外国語会話能力や情報活用能力についての継続的な調査
 - ②小6，中2に対する教科の基礎学力や関心・意欲・態度についての継続的な学力調査および質問紙調査
 - ③小6，中2に対する社会性の変容について行動観察などの評価等を行う。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究の組織作り ○ 各プロジェクト部会による研究構想案作成・理論構築 ○ 各プロジェクト部会の研究構想案に基づく単元開発の試み ○ 平成15年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○ 第1年次研究内容のまとめと評価 ○ 第2年次の研究計画書及び教育課程の編成

第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各プロジェクト部会による幼小中一貫教育カリキュラムの作成 ○ 各プロジェクト部会による評価規準作り ○ 平成16年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○ 第2年次研究内容のまとめと評価 ○ 第3年次の研究開発書及び教育課程の編成
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各プロジェクト部会による幼小中一貫教育カリキュラムの修正 ○ 各プロジェクト部会による評価規準の修正 ○ 平成17年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○ 各プロジェクト部会の3年間の研究内容のまとめと評価 ○ 第3年次の研究内容全体のまとめと評価

(3) 評価に関する取り組み

第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ○調査・評価部会により小3, 小5, 中1, 中3を対象とした実態把握 <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的コミュニケーション能力の評価 ・ 関心・意欲・態度の評価 ・ 教科の基礎学力の評価 ・ 社会性の評価
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ○調査・評価部会により小3, 小5, 中1, 中3を対象にした学力向上の実態把握 <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的コミュニケーション能力の評価 ・ 関心・意欲・態度の評価 ・ 教科の基礎学力の評価 ・ 社会性の評価
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ○調査・評価部会により小3, 小5, 中1, 中3を対象にした学力向上の実態把握 <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的コミュニケーション能力の評価 ・ 関心・意欲・態度の評価 ・ 教科の基礎学力の評価 ・ 社会性の評価 ○3年間の変容の調査

5. 研究開発の成果

(1) 実施による効果

各プロジェクトにおいて、カリキュラムと学習指導法の研究開発及び評価規準の作成に取り組むことができた。

- 国際交流学習開発部会では、広島大学の留学生などとの交流学习をふまえたカリキュラムを作成することができた。また、中学校では全職員で国際交流学習に取り組む体制を確立し、Global citizenshipの時間を導入することができた。
- マルチメディア学習開発部会では、従来の情報教育に加え、メディアリテラシーを軸に据えた単元を発達段階に照らし合わせ配置することができた。
- 幼小連携学習開発部会A（表現科）では、「感じる力」を大切にすることや「総合的に育む」ということを確認し合いながらカリキュラムの作成や実践を積み上げていくことができた。
- 幼小連携学習開発部会B（発見科）では、子どもたちの発達のその時期その時期で、体験させなくてはならないことを十分に保障しながらの活動や単元を構成し実践することができた。

- 小中連携学習開発部会では、小中教員のT・Tや異校種・異学年交流を取り入れながらの系統性をもたせた題材やカリキュラム開発を行い、評価の観点・基準を設定することができた。
- かかわり学習開発部会では、幼小中合同行事や、「道徳」と「特別活動」の総合単元を設定することができた。
- 調査・評価部会では、開発研究指定校として研究を精選、焦点化できるように様々な取り組みを進めたり、子どもの学力調査や質問紙調査などを実施することができた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

各プロジェクトごとのカリキュラムは作成されつつあるが、三原学園全体の全体像が見えづらいという課題とともに、各プロジェクトでは次のようなことを改善点としてとらえ、今後の研究推進に生かしていく。

- 国際交流学習開発部会では、評価項目及び評価方法の確立、広島大学留学生との交流や中学校グローバル・シテイズンシップの時間の改善などを行っていく。
- マルチメディア学習開発部会では、学内の情報機器の整備を課題としながら実践を進めていく。
- 幼小連携学習開発部会A（表現科）では、担任一人で多岐にわたる児童の活動を見取ることや専科教師との連携の難しさをふまえながらの実施を工夫していく。
- 幼小連携学習開発部会B（発見科）では、出口である小学校3年生の位置づけを明確にしていく。
- 小中連携学習開発部会では、学園全体の21世紀型教科学力を明確にしたうえでの小中連携の内容の充実や条件整備を図っていく。
- かかわり学習開発部会では、人間関係力育成に向けての全教職員の意識統一を図りながら実践をすすめていく。
- 調査・評価部会では、調査に関する職員全体へのフィードバックや子どもの変容を見取る調査実施を進めていく。

本学園の教育課程表

広島大学附属三原幼稚園 教育課程表（平成 16 年度）

年少児	1 期		2 期		3 期		4 期		合 計		
	2		3		4		3		12		
年中児	5 期		6 期		7 期		8 期		合 計		
	3		5		5		4		17		
年長児	9 期		10 期		11 期		12 期		13 期		合 計
	3		5		5		4		3		20

幼稚園においては、各期における主に国際的コミュニケーションの学習にかかわる活動が主となる日を日数として示したものである。幼稚園の活動は総合的に行われるもので、日常のなかで行われている活動は含まれない。

広島大学附属三原小学校 教育課程表（平成 16 年度）

	教 科											国 際 コミュニケーション		かかわり学習		合 計
	国語	社会	算数	理科	発見	表現	音楽	図工	体育	家庭	総合	国際 交流	マルチ メディア	道徳	特別 活動	
1年	255 (-17)		114		85 (-17)	46	50 (-18)	50 (-18)	80 (-10)		0	68		34	50	832 (+50)
2年	263 (-17)		155		88 (-17)	50	50 (-20)	50 (-20)	80 (-10)		0	70		35	51	892 (+52)
3年	218 (-17)	70	150	70		15	55	55	85		35 (-35→国際) (-35→特活)	70		35	70	928 (+18)
4年	218 (-17)	85	150	90			60	60	90		35 (-35→国際) (-35→特活)	70		35	70	963 (+18)
5年	163 (-17)	90	150	95			50	50	90	60	30 (-35→国際) (-45→特活)	70		35	80	963 (+18)
6年	160 (-15)	100	150	95			50	50	90	55	30 (-35→国際) (-45→特活)	70		35	80	965 (+20)

広島大学附属三原中学校 教育課程表（平成 16 年度）

	必 修 教 科										選 択 教 科	国 際 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン		か かわ り 学 習		合 計
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	技術 家庭	英語	総合		国際 交流	マルチ メディア	道徳	特別 活動	
1年	120 (-20)	105	105	105	45	45	90	50 (-20)	105	35 (-65)	0	105		35	35	980
2年	85 (-20)	105	105	105	35	35	90	55 (-15)	105	35 (-50)	50 (-20)	105		35	35	980
3年	85 (-20)	85	105	80	35	35	90	30 (-5)	105	35 (-80)	120	105		35	35	980

学校等の概要

1. 学校名、校長名

広島大学附属三原幼稚園（ひろしまだいがくふぞくみはらようちえん）
 広島大学附属三原小学校（ひろしまだいがくふぞくみはらしょうがっこう）
 広島大学附属三原中学校（ひろしまだいがくふぞくみはらちゅうがっこう）
 学校園長 小原 友行

2. 所在地、電話番号、FAX番号

広島県三原市館町2丁目6-1 TEL 0848-62-4884
 FAX 0848-60-0121

3. 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

幼稚園

3歳児		4歳児		5歳児		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
23	1	69	2	62	2	154	5

小学校

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数										
80	2	76	2	78	2	76	2	77	2	74	2	461	12

中学校

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
83	2	80	2	81	2	244	6

4. 教職員数

校長	教頭	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	3	33	2	15	0	1	0	5	0	60